

淡路島の津名東小学校で体験談を語りました



防空ずきんをかぶった子どもの人形を手に、学童疎開の体験を語る米倉澄子さん＝淡路市生穂

疎開生活 つらさ語る

東灘の83歳、淡路の児童に

戦時中に米軍による空襲を避けるため、淡路島などへ学童疎開した経験がある神戸市東灘区の米倉澄子さん(83)が2日、淡路市を訪れ、少女時代のつらい戦争体験を小学生たちに語った。

米倉さんは20年以上前から、神戸や大阪の学校などで戦争体験を語る活動を続けている。昨年夏には、かつて疎開した淡路島を訪問。淡路市立津名東小学校の児童たちに、疎開生活について語った。今年も同小の招きで島を再訪。同小の近く

の生穂会館で、5、6年の児童約40人を前に講演した。

米倉さんは、防空ずきんをかぶった戦中の子どもの人形を見せ、空襲から逃れるために神戸の家族と離れ、淡路島や豊岡市出石町へ疎開したと説明。「疎開生活は飢えとシラミとの闘いだっただ」。空腹に耐えかねて給の具をなめて飢えをしのいだこと、頭にシラミがわき、体中にできた吹き出物の血を、ガーゼや紙がないため障子紙でふいていたことなどを明かした。

疎開中、引率の教員から

「神戸で空襲があり、君たちの家は焼けたが、家族は元気だよ」と伝えられたという。「それはウソだった。本当は空襲で家族を失った子もいた。戦争が終わるまで、事実は知らされなかった」と語った。

米倉さんは「戦争が起きると、たくさんの方が悲しい思いをする。今日の話を頭の片隅に残し、知らない人に伝えてほしい」と呼びかけた。最後に6年生の児童が代表して感謝の言葉を

述べ、「空襲に遭った人たちの悲しい気持ち伝わってきた。二度と戦争を起こ

してはいけないと思いましたが」と話した。

(吉田博行)

朝日新聞 8月8日神戸版に掲載されました。